
Distortion World

ぴえろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

D i s t o r t i o n W o r l d

【Nコード】

N 2 9 1 8 U

【作者名】

ぴえろ

【あらすじ】

それは普通ではないけど、ただちよつとした特別だっただけだった。

だが、彼女との出会いがそのちよつとした特別を世界を歪ませる程の特別へと変貌させた。

特別となった彼を中心に世界は歪む。その歪んだ世界で、果たして彼らは何を掴むのか…。

序章「Distortion／歪みの始まり」

誰かを悲しませてでも、笑いたくない。

欲しかったものは、悲しませてでも欲しいものじゃなかった。

だって欲しいのは自分を抱き上げてくれるその手と笑顔だったから。

側に誰もいなくて、寂しくて、一人の時間が嫌で。

いい子になろう。そうすればきっと…きっと報われるから。そうして私はそうやって生きることを決めた。今更ながら思えば、幼いながらの決意だったと思う。

そんなある日のこと。ぴんぽーん、と。家の中に来客を知らせるベルの音が鳴った。

お客さんだ。だけど、今は家には今、自分しかいなくて。少し、怖いけれど、いい子にしてなきやいけないから。

だから、お母さんが教えてくれたように私は玄関へと向かった。知らない人だったらお家にいれちゃ駄目。教えられた事をちゃんと思い返して。

「どちらさまですか？」

「あ、えーと、ここ、高町さんのお宅ですか？」

玄関の向こう側から聞こえてきたのは、知らない男の人の声。私は少し戸惑いながらも返答を返した。

「え、あ、はい。高町ですけど…」

「あ、そう…ですか、あの、お子さん、です、…だよ、ね？ お母

さんかお父さんはいるかな？」

「えと…今、いません…」

「…あー、そっか。その、俺、この近所に引っ越してきた工藤って言って、その、俺の親が高町 桃子さんとの知り合いだって聞いたんで、挨拶に来たんだ。その挨拶の品があるんだけど……その、良ければ預かってもらえるかな？」

「え、あ、は、はい」

どこかあやふやな口調で聞いてくる相手に、私はすぐに扉を開けた。悪い人じゃなさそうだし、お母さんの知り合いの知り合いの人の子供だと言っているし、品物を受け取らないと、思ったから。すぐに家の鍵を開けて、扉を開いた。そしてそこにはおそらくお姉ちゃんぐらいの年だと思うお兄さんが立っていた。

「あ、はじめまし…て…」

扉が開いて、挨拶をしていたけど私の顔を見て、すごく驚いたような顔をしているお兄さん。顔に何か付いてるのか、と思って手を伸ばすけど、何かが付いてるような気はしなかった。

どうしたんだろう？ 何を見て驚いているんだろう？ …私、何か間違っちゃったのかな、とすごく不安になる。どうしよう、いい子にしなければいけないのに。

そう思ったら涙が滲んできて泣きそうになる。ふえ、と声が漏れて。

「あ、ああ、ありがとう！ 良い子だねっ！ 一人で留守番してる

の？」

「え、う…う、うん…」

「そ、そっか。偉い子だね！ えと、そうだ！ こ、これ、飴！
飴あげる！ 良い子にしてるご褒美！ お兄さんからの贈り物！」

どこかあわてたようにお兄さんがポケットから取り出した飴玉を手渡してくる。受け取って良いのかどうかわからなくて、戸惑っているとお兄さんが私の手に飴玉を握らせてくれた。

その手の感触が暖かくて、なんだか嫌じゃなかった。だけど初めて会った人の手だったから、ちよつと、びっくりして。

「あ、じゃあ、これお母さんとお父さんに渡してね！ そ、それじゃあつ！ 鍵ちゃんと締めて良い子にね！」

「え、あ、は、はい」

最後まで慌てたように声を上げてお兄さんは私に何かの箱を渡して駆け足で行ってしまった。

少しびっくりしてたけど、お兄さんに言われたとおり、鍵を閉めて家の中へと戻る。手の中にはお兄さんに手渡された飴玉。わずかに残る手と手が触れあった感触。

それが…高町なのはと、お兄さんの初めての出会いだった。

—Side ???—

はあ、はあ、と荒く息が乱れて呼吸が苦しくなった。

マジかよ、マジかよ、と心の中は何度も呟いている。今まで生きて一番の驚きだった。

そうだ。思い出した。そういやそうだった。何かどこかで聞いたことがあると思ったんだ。

この街、「海鳴市」って名前に。聞き覚えがあつたんじゃないか。

「高町 桃子」って名前にも聞き覚えがあつたじゃないか。

そんな馬鹿な、ふざけんな、どうして。そんな言葉が口から飛び出そうになって、何度も唇を噛み締める。

「…リリカル…なのは…」

呟いた声は、ただひたすらに枯れていた。信じられないという衝撃が脳裏を混乱させる。それが嫌でも自分という存在を観察させる切欠となった。

工藤 尚也。それが俺の名前だ。この海鳴市の高校に単身、引越してきた学生だ。

俺には秘密がある。それは、俺がよく創作物にある「転生」した人間だと言うことである。

口にすれば誰だって頭がおかしいとか、黄色い救急車を呼ぶとか、

そつと肩を叩いて生暖かい視線を向けてくるとか、病院行けよ、と善意で言ってくるに違いない。

だけど、どう足掻いたって、どんなに信じたくなくても、俺が転生者だという事実是不変ならない。

俺には、今の両親とは別の両親が居た。俺の姓は工藤じゃなかったし、俺は普通に地元の小中高と学校を卒業して、もう目前に就職だつて控えていた。

別に何かとちつた訳じゃない。死ぬような馬鹿な真似は避けてたし、転生なんか願ってもいなかった。普通に一生を仕事して過ごして、両親にお金を返して、新しい職場とかで彼女が出来れば良いかな、とか願つてた。

だけど、ふと気づいたら俺の身体は5歳児ぐらいにまで縮んでいた。その時、俺は酷く混乱していさめようとする両親にかなりきつく当たってしまった。

その負い目が残っている。嫌でも記憶に残る自分の声。

——あんた等なんか、俺の親じゃないっ!!

子供の戯れ言と言えばそれで済んだ。それでも、忘れられないんだ。今の両親の酷く傷ついたその顔を。

その日から、俺は少しずつ、自分がどういう状況に置かれたのかをゆっくりと把握していった。

俺が工藤 尚也になってしまったこと。俺は何故かいきなり、人生をやり直させられたこと。

ふざけるな! と叫びたかった。何でこうなった。どうしてこうなってしまったのか。俺はそんな体験なんかしたくもなかったし、今の両親にどうやって付き合えば良いかなんてわからなかった。

…そう。わからなかったんだ。俺がどうすれば良いか、なんて。

俺の身体は5歳時でも、俺の中身はもう18歳だったんだ。社会の仕組みだって知ってるし、子供の教育にどれだけお金がかかっているとか、両親にどれだけ苦勞をかけているとかわかってるんだ。

だから素直に甘えるなんて無理だ。自分で金を稼げないから欲しいものなんて望めなかった。望むものは子供らしくないものばかりだった。

そうなければいつしか俺は孤立していた。頭が良いけど無愛想。当然、そんな子供はいじめの対象になる。さすがに中身は成人近かったからいじめは苦にならなかった。

だが、そんな環境だ。友達など、望めるはずもなく、勉強も小学生程度の問題などあつという間に出来る。

ただ、何も望めなかった。望めない分、周囲を観察する時間が多くなって嫌でも自分がもう「工藤 尚也」になってしまったんだと思ひ知らされてしまった。

どうしようも無く涙が出てしまった。俺は、本来の俺はどうなっていたのか？ 転生したということは死んでしまったのか？

そうなれば両親は？ 絶対に自分が先立ったはずだ。そしたら両親に俺は顔向け出来ない。

俺を今まで育ててくれた両親。その人に何ももう恩返しも出来ないのだと思うと辛くて、悔しくて泣いた。反抗だってした。迷惑だっけかけた。時には喧嘩もして泣かせてしまった。

だけでも、両親は両親だった。俺の親だったのだ。その人達に俺は何の恩返しも出来ずにあの世を去ってしまった。そうしてここで生きている。

俺はこんなの望んでない！ …だけど、俺がそうして「工藤 尚也」であることを否定すれば、今、「工藤 尚也」の両親が悲しむ…納得はいかない。思ひ出せば涙が溢れる。もう両親の声も聞こえない。顔も見れない。友達とも会えない。

だけでも、今の俺は一人で生きてる訳じゃない。今いる「工藤 尚也」の両親が、その父母、つまり俺にとっての祖父母や親戚の皆

が俺を愛してくれている。

：踏みにじれない。踏みにじることなど出来はしない。だから、俺はようやく長い時間をかけて自分が「工藤 尚也」であることを受け入れられた。

自分でも変な子供だったと思う。同年代が見向きもしないだろうような本などを好み読んだ。友達は少なかったが、それでも色濃い付き合いが出来たと思う。

俺は今の両親を幸せにしようとした。それがきつと俺に出来ることだと思った。俺が出来た子だったからだろう。年の離れた妹と弟が生まれた。俺は言える。幸せだったと。

俺は自分がいない、とか思った訳じゃない。だが俺が変で育て甲斐が無いだろうな、というのはどこか思っていたし、両親がぼやいていたのも知っている。

なら俺に向ける心配の分は、どうか生まれたばかりのこの下の子達に注いで欲しい、と思い、俺はこうして単身、一人暮らしをして生きることを決めた。

10年ほど。本来なら10年前、そのように歩むはずだった道。一人暮らしというあこがれていた環境。10年という間をおいて俺はようやく「独り立ち」するということに打ち震え、感動していた。立派に生きよう。そう思った。一人暮らしをすっかり頑張ろう、一人で何でもこなせるようにしよう、と。

それでも一人暮らしには不安がある。幸い、近くに両親の知り合いである「高町 桃子」という女性が居るらしく、両親にも顔を合わせるように進められた。

そうして…出会ってしまった。そして思い出してしまった。そして理解してしまった。

「高町…なのは…」

アニメ「魔法少女リリカルなのは」。
なのは。高町なのは。そう、つまり、ここは。リリカルなのはの
世界だと言うことに俺は気づいてしまったんだ。

＊ ＊ ＊

どうする？ と俺は一人暮らしをする際に選んだマンションの一
室で考えていた。

どうする、と言っても、どうしようもない。ここが魔法少女リリ
カルなのはの世界だとして、俺に今、何が分かり、何が出来る？
出来ることなど何一つ無い。確かだが、高町なのはが3年生、つ
まり9歳の時に彼女は「魔法」に巻き込まれるはずだ。

見たところ、高町なのははまだ小さかった。つまり「魔法少女リ
リカルなのは」の物語が始まるまで猶予があるということだ。

どうする？ 再び自らに問いかける。俺に魔力があるのかどうか
はわからない。あったとすれば、最悪、確か「ヴォルケンリッター」
という騎士に魔力を狙われるはずだ。

ならばあるとしたら、俺はそのヴォルケンリッターとやらに襲わ
れる可能性がある。冗談ではない、と思う。死にはしないとしても、
そんなものゴメンだ。

それ以前に、確か高町なのはが最初に経験する事件では街にもい

ろいろと被害が出るはずだ。最悪それに巻き込まれたら？ 魔力があるにしろ、ないにせよ、魔法を使うための道具である「デバイス」はユーノという少年からもたらされる「レイジングハート」一つだけだ。

つまり、俺に魔力があろうとなかろうと、デバイスが一つなため、俺が関わることによって高町なのはがデバイスを得ること無く、物語が大きく変わってしまう恐れがある。

どうする？ 再び問いかけてくる脳裏の声に俺は苛立たしげに髪をかき乱した。

「わかるわけねえだろっ!!」

勉強ならどうにかなる。一度やったことのある問題だ。小・中の勉強をしっかりやってきたため、以前よりも良い成績がとれる自信だってある。

運動だってそうだ。遊ぶことが少なかったため、そういう部活などに専念したため、結構自信がある。まあ、それでも人並みでオリンピック選手になるとかそういう自信ではないが。

人付き合いだって、人よりも約10年分も経験値がある。まだまだ未熟だとは思いますが、それでも同年代と比べれば出来る方だと思う。だが、魔法だとか、未来がどうなるのかなどわかったものじゃない。くそっ、と悪態を吐くも何も解決しない。

「…どうすりゃ良いんだよ…」

これから頑張ろう、と思った。そのためにここに来たはずだった

のに：どうしても心は沈んでいった。

—Side out—

＊＊＊

—Sideなのは—

それはお使いを頼まれて近くのスーパーに行った帰りのことでした。

ふと、公園のベンチで空を見上げている人を見つけました。それはこの前、近所に引っ越してきて挨拶に来ていたお兄さんでした。

ご挨拶で貰ったのはお菓子で、私も好きなお菓子でした。そこでまず思ったのはお礼を言わなきゃ、と私は思いました。

だからすぐに私はお兄さんの方に寄っていくと、お兄さんはただ空を見上げているだけで、何かしているという訳ではなさそうでした。

少し声をかけるのは戸惑いましたけれど、お礼を言わなきゃと思って私は意を決して話しかけることにしました。

「く、工藤さん？」

「…ん…？ あ…な…高町、さん？」

「あ、ど、どうも、こんにちは…あ、もう、こんばんは、かな？」

「…そうだね、もう、こんばんは、かな？」

今の時間はもう夕方。だんだんと日が暮れてくる時間でした。だから私は挨拶をしたけれど、その挨拶が間違っていないかどうか不安で言い直しました。

するとお兄さんは少し考えるような仕草をしてからこんばんは、と言いました。最初に間違っちゃったので、ちよつと私は落ち込んでしまいました。

だけれど、すぐにお礼を言わなきゃ、と思って顔を上げました。

工藤さんの顔をまっすぐに見て、軽く息を吸って。

「く、工藤さん！」

「は、はい？」

「こ、この前、お菓子おいしかったです。ありがとうございました」

ぺこり、と頭を下げてお礼を言う。感謝の気持ちを込めて。良い子にならきつと思うから。

少しどきどきする胸を押さえて顔を上げると、少し驚いたような顔をしてこちらを見ている工藤さんがいて、少し戸惑う。

また何か間違ってしまったんじゃないかと思って、少し不安になる。どうしよう、と思っていると、工藤さんが声をかけてきてくれた。

「えと、喜んでくれたなら嬉しいよ。こちらこそ、どう致しまして」

ぼん、と。それは何気ない動作で頭に置かれた手。それは優しくな手つきで頭を撫でてくれる。

お父さんにしてもらった時のように。お母さんにしてもらった時のように。優しく、優しく撫でてくれるその手。

思わずびっくりして工藤さんを見ると、工藤さんは自分の手が私の頭を撫でていることに気づいたのか、ちよつと驚いたような声を上げて手を離す。

「ご、ごめん！ 急に頭なんて撫でちゃって！」

「い、いえ、大丈夫です、けど」

「いや、下の子とかの頭、よく撫でてたから、その癖で…ごめん。吃驚しただろ？」

「あ、ちよつと…で、でも！ 嫌じゃなかったから！！」

何故か自分でもよくわからないけれど、私は工藤さんに頭を撫でられたのは嫌じゃなかったということを伝えたかった。

それにまた工藤さんが少し驚いたような顔をしていたけれど、少し間をおくと、すごく優しい笑顔を浮かべてくれた。

「……そっか。良かった。君は、本当に良い子だね」

良い子だね。その言葉に少し驚いて、そして嬉しくなりました。

良かった、と安心しました。私はちゃんと良い子でいられてるんだ。それが嬉しくて、私も笑いました。そうすると工藤さんも嬉しそうに笑ってくれました。

その笑顔がなんだかとても暖かく感じました。ぽかぽかと胸が温かくなりました。

「…暗くなってきちゃったね。危ないから送るよ」

「え？ でも…」

「良いんだ。帰り道だから。それとも嫌かい？」

「い、嫌じゃありません！ その、よろしく願います！」

「いや、そんな畏まらなくていいよ。…それじゃ、行こうか」

少しおかしそうに笑って工藤さんは立ち上がって私にそう言いました。私もそれに、はい、と頷いて工藤さんの隣を歩き始めました。

—Side out—

* * *

公園でぼんやりとしながら俺は悩んでいた。外の風に当たればこの悩みもどうにか出来るか、と思った。だが、何の意味もない。

あれから何度も考えた。もしかしたら、ここはただリリカルなのはと似たようなだけの世界で、高町なのは別に魔法と何も関係なく人生を過ごしていくんじゃないか、と。

本当にアニメのようなことが起きるなんてことはない、と。そう考えたこともあった。だがそれでも、知っている以上、無視することとは出来なかった。

苦しかった。どうすれば良いのかわからない。ただ何度も繰り返していた。同じ問いかけを。俺は、どうすれば良いのかを。

そんな時だ。急に声をかけられた。驚いたことにその声をかけてきた子供はあの高町なのはだった。

一体彼女がどうして俺に話しかけてくるのか、と考えていたらこの前、ご挨拶に行った時に俺が渡したお菓子の言葉だった。

一瞬、俺は呆気取られた。そういえばそんなこともあったな、と思いついて、ちょっと慌ててこちらこそ、とお礼を言い返す。

気が動転していたのだろう。何故か俺の手は高町なのはの頭に伸び、その頭を撫でていたのだから。まだ俺が実家にいた頃、下の子供達にそうしてやっていたように。

それに気づいてすぐに手を離す。くそう、何やってるんだ俺は！と内心悪態を吐く。気が動転しすぎだろ、と。

俺はすぐに謝った。挨拶はしているとはいえ、あまり知らない人に頭を撫でられるのは嫌だろう、と思ったからだ。

だが、高町なのはから帰ってきた言葉に俺は少し驚いた。人の良い子だな、と思った。そして……思った。

(…なんだ。子供じゃないか)

当たり前だ。そんなの当たり前だ。彼女は人間で、子供だ。確かにアニメの中の世界の住人だったけど、今は目の前で息をして、笑って、驚いたりして、生きてる。

そう、生きてるんだ。この世界がアニメと同じ世界だから生きてないとか、人間じゃないとかそんな訳じゃない。そう、彼女は生きてるんだ。

生きている。そう。俺と同じように。なのに確か、彼女の家庭環境はさして良いものじゃなかったはず。それが魔法に対する執着に変わったとか何とか…。

もう薄れかけている記憶を引っ張り出す。まあ、そういう創作ものは好んで読んでたし、自分でも執筆した記憶だってある。俗に言う黒歴史という奴だが。

だから…思ってしまったのだ。この子は、それでもこんなにまっすぐに、笑顔でいられるということの凄さに。そして、その悲しさに。

生きている。俺たちは生きている。当たり前だ。この世界で生きているんだ。なのに、彼女はあまりにも報われない生き方を強いられてきた。

…悲しいことじゃないか。何で、そうなってしまったんだろう？仕様がないことだけと思わずにはいられない。

自分は知っている。だからこそ、気づけた。彼女のその笑顔の裏に秘めたその思いを。知ってしまったている。卑怯なことだ。だけど、だからこそ。

「……そっか。良かった。君は、本当に良い子だね」

報いてやりたいと思うのは、傲慢なことだろうか。…ふと、下の子供達のことを思い出す。なのはそんな小さな子供じゃないけれど、それでもまだ子供だ。お母さんやお父さんが恋しいだろう。愛に飢えているのだろう。

実際、知らない人に頭を撫でられても嫌じゃない、というのは、そういうものの現れなんじゃないかと思う。それは悲しいことだと思う。

だから、君は良い子なんだよ、と告げよう。少しでもそれが彼女の心を軽くするなら。俺の言葉に、彼女は嬉しそうに無邪気に笑う。ああ、それで俺も少し報われた気になる。

俺にしか出来ないことがある。俺は知っている。知ってしまったている。彼女が歩むだろう未来の可能性の一つを。俺の手は借りずとも、きっと彼女は成し遂げるだろう。だが、それでも、手助けがしてやりたくなくなった。

悩んだ時は吐き出せば良い。困った時は相談に乗れば良い。…高町なのはという少女は抱え込む少女だった。だからこそ、その重荷が軽くなれば良い。

知っているから。そして知ってしまったから。そして思ったから。改めて小学生をやり直して、一人の孤独がどれだけ辛いものか、俺はわかっていくつもりだ。

それを、こんな子供が受けるだなんて、それはあまりにも悲しすぎるだろう、と。英雄願望なのかもしれない。救ってやろうだなんて傲慢かもしれない。でもそう思ったのは嘘じゃない。

気づけばもう空は暗くなりつつあった。このまま一人で帰すのは不安があった。だから、一緒に帰らないか、と誘ってみた。彼女は戸惑いながらも受けてくれた。なんだかその様子が可愛くて思わず笑ってしまった。

ああ、普通の女の子だ。今はまだ。これが後に「悪魔」や「魔王」だなんて呼ばれてしまう子になるだなんて信じられない。女の子に

「悪魔」や「魔王」はさすがに酷いだろう、と思った。

俺に何が出来るのかわからない。だけれど、この子の未来が俺の知る通りになるのは少し不安だった。特にこの子が経験するだろう、大怪我を負う事件。

あれを防げれば良い。知っているから。その未来を歩むかどうかは知らないけれど、だけれども、そうなって欲しくはない。そのために自分が出ることがあるならしてやりたい。

「工藤さん」

「ん？」

「その、ありがとうございます。送ってもらって…」

「いいよ、別に。帰り道だし」

本当、礼儀正しい子だ。確かに「良い子」だ。…そうならなければならぬ、と高町なのはは思っていたはずだ。

「あの、工藤さん…」

「尚也」

「え？」

「尚也で良いよ。工藤さんなんて堅苦しくて慣れないから」

「あ、は、はい。わかりました、尚也さん。…あっ！ わ、私は高町なのはです！なのはで良いです！」

「うん、じゃあそう呼ばせて貰うね。なのはちゃん」

「はい！」

うん。元気でよろしい。出来ればこのまま笑顔で居て欲しいもの

だ。これから来る未来がどんな未来になるかはわからない。だけれどこのこの幸せを願っても良いだろうか？ 一つの可能性を知ってしまっている俺は、願わずにはいられない。

そのために出来ることをしよう。きっと、俺が記憶を持って生まれたことには意味があるはずだ。きっと、そうだと思う。この為なのかはわからない。だけれど、それでも俺は俺の出来ること、しようと思うことをしていこうと思う。

その日、傍らに高町なのはが歩くその隣で、俺は静かに決意を固めた。

第1章「metamorphosis／変異する世界」 01

—Side 尚也—

高町なのは：いや、なのはちゃんと出会ってからもう大分時が経った。

改めて俺は両親の知り合いだと言う「高町桃子」さん本人と顔を合わせる事が出来た。第一印象は若いなあ、と言うのが正直な感想。あれで30代だと言うのだから信じられない。

そんな桃子さんの夫である「高町士郎」さんとも出会った。ナイスガイな人である。正直お似合いとしか言いようがない。

それからなのはちゃんの兄であり、俺の別クラスではあるものの、同学年である「高町恭也」。そしてその妹さんの「高町美由希」と出会い、俺の生活には何だかんだ言って高町家が絡む事が多い。

いや、自分から積極的になのはちゃんと遊んでいるからなんだけどね。：一度それで勘違いされて恭也と美由希にボロボロにされた事もある。こちらと少し運動神経が人より良い程度の一般人ですよ？ 勝てる訳ないじゃないですか：。

それでなのはちゃんが2人の事を叱った時のあの形相は凄まじかった：。後の冥王の：ゲフン、エースとしての風格を見せつけられた気がした。それに狼狽える恭也先輩と美由希もおかしかったが。

まあ、そんな騒ぎもありながら俺は知り合いの息子、なのはとよく遊んでくれるお兄ちゃん、恭也の同い年、そして一人暮らし、というこれらの要素の為か、よく高町家で夕食と一緒に食べる事が多

い。

「尚也さん、尚也さん！ 遊ぼう！」

「おっと。なのはちゃん、どうどう、まだご飯食べたばかりだろ？」

夕食を食べ終わればなのはちゃんがじゃれついてくる。正直、この懐きようには驚いたが、まだ彼女は小学校に上がったばかりの年齢だ。それであり家族と一歩引いて生活をしていれば家族にじゃれつく、という事もあまりしなかったのだろう。

そこにぽつ、と現れた俺。何だかんだ言っただのはちゃんが気になって構っているうちにこうなってしまった。別に悪いとは思わないが：ちよつと恭也？ 何で凄いい目でこっち睨んでるんですか？ ちよつと美由希まで何だよっ！？ 俺が何したってんだよっ！？

くそおつ、誰か味方は：って、貴方もか士郎さんっ！？ 桃子さんはクスクス笑ってるし、クソ、孤立状態か！？ ：まあいつものパターンですけどね。：どうにかならんかな、本当。なのはちゃんが居る間はこの居心地の悪い視線を向けてくるだけなんだが、なのはちゃんが離れると：：：おおう、恐ろしい。

故に俺は俺の身の安全と、後はなのはちゃんと遊んであげたいと思うので、一石二鳥と言わんばかりになのはちゃんとの遊びに逃避するのだ。：そう、だからそんな「ロリコン」って目で睨むな美由希。恭也は殺気を込めないでください。士郎さん、笑顔だけど放たれる威圧感が一番恐ろしいんですが：。

「さて、なのはちゃん。何して遊ぼうか？」

「えーとね：えーとね：」

どうやら遊ぶという事が第一で何をして遊ぶというのは考えていなかったようだ。まあ、こちら辺は普通の子供…っていうか子供なんだよな、なのはちゃんは。

本当に、この子がジュエルシードとか闇の書とか、あとは犯罪者と戦うようになるだなんて想像出来ないわ。…まあ、この戦闘民族みたいな人たちの血を引いていると言えばそれで納得しちゃうんですけどね。でも…子供だよなあ。

今は遠くの地にいる俺の両親。そして生まれた弟と妹。その妹はこのなのはちゃんのように可愛く育ってくれるのだろうか？ 父さん、母さん、捻くれてたら兄は泣いてしまうぞ。お兄ちゃん、色々と頑張るからそっちも頑張ってくれ…。

「なのは、そろそろお風呂に入ってくださいい」
「はい！」

…え？ なん、だと？ 風呂ですと…？

しまった！？ もうこんな時間か！？ なのはちゃんと付き合っていて時間を忘れていた…！！ 不味い、これは離脱の機会を失った…！！ つまりソレは俺にとっての…地獄の始まりという意味で…！！

ぱたぱた、と子供らしく慌ただしい様子でお風呂に向かうのはちゃん。そして、リビングからなのはちゃんが居なくなると同時に、俺の胃に穴を開けんばかりの勢いで向けられる殺気。

…殺気とかどうかは実際わからないんだけど、何だろうね。本能的にこれが「殺気」だって思っちゃうんだよね。背中がぞくぞくして体が竦むっていうか。

「…尚也」

「…なんでござんしょ？ 恭也」

「…お前にはスジがある。どうだ？ これから訓練でもしようじゃないか。俺がみっちり教えてやろう」

「いや、はははは、何言っちゃってるんですか？ 俺に剣術の才能なんて皆無ですヨ？」

「えー？ そんな事ないって」

重く低い声で、明らかにボコる為の理由を得ようとしている恭也と、目が笑っていないけど満面の笑顔を浮かべてこちらに引き込もうとしている美由希。まさに…前門の虎と後門の狼！！

「そうだ。尚也君。それに一人暮らしだろ？ なのはに付き合って貰って遅くに帰ってもらってるしね。もしも通り魔になんかに襲われた時に役に立つかもしれないだろう？」

ぽん、と俺の肩に置かれる手。…士郎さん、あんたいつの間に最後に…！？ 最後の希望、と言わんばかりに俺は桃子さんへとヘルプコールと言わんばかりに視線を向けた。どこか困ったように笑いながら、ごめんね、と両手を合わせる桃子さん。

………神は死んだっ！！！！ そりゃさ、転生して部活なにやろうかなあ、前はやらなかった剣道とか弓道とか面白そうだなあ、と思って少し囁った事がある程度にはやったけど、本当才能とか無いから！！

いやあああっ！？ 引き摺られていく！？ 右肩は士郎さん、左

肩は美由希。そして逃さないように恭也先輩が引き摺られる俺の前に立つ。

ち、ちくしよおおおおっ！！！！！俺は、俺はロリコンじゃないし、フラグを狙ってる訳じゃないんだっ！！だから、誰か助けてくれえええっつ！！！！！！

—Side out—

* * *

—Sideなのは—

ぷくぷく、とお風呂に気泡が立つのをぼんやりと見ている私。考えているのは尚也さんの事。お母さんのお友達の子供で、この街に一人引っ越してきた人。

私と遊んでくれる優しい人。私の我が儘を受け入れてくれる優し

い人。時々困ったような顔をする事はあるけど、それでも嫌な顔をした事はなかった。

ふと気がつけば、尚也さんの事を考えてる。今、何してるのかな、とか。尚也さんと会えると嬉しい。家にいるともっと嬉しい。遊んでくれるのが凄く嬉しい。

嬉しい。楽しい。お父さんが怪我で入院して、一人だったあの時間。あの時間とはまったく真逆の楽しい時間。尚也さんがいて、お兄ちゃんがいて、お姉ちゃんがいて、お父さんがいて、お母さんがいる。

尚也さんと一緒にいるようになってから、お兄ちゃんもよく声をかけてくれるようになった。お姉ちゃんも一緒に遊んでくれるようになった。お父さんも、お母さんも、いっぱい、いっぱい話すようになった。

今まで私はひとりぼっちになっていたように感じていた。お父さんはお母さんと、お兄ちゃんはお姉ちゃんと、それぞれ仲が良かったから。だから私にはどこか居場所が無いように感じていた。

だから、そこに尚也さんが来てくれた事で変わった。毎日が楽しくて、凄く、そう、幸せなんだって。

「…尚也さん」

ふと名前を呼ぶだけで口元が緩むのが自分でもわかる。えへへ、と声が漏れて私はお湯の中に頭を沈ませた。耳の中に水が溜まってしまう。お母さんに怒られちゃうかもしれない。

あ、そうだ。耳掃除、尚也さんに頼んでくれたらしてくれるかな？
してくれたら嬉しいなあ…。

—Side out—

*
*
*

—Side 尚也—

恭也、美由希、士郎さんの三人に心身共にボロボロにされた俺はフラフラになりながらも高町家の居間へと戻ってきた。離脱のタイミングを測り損ねた俺のミスだ。くっ、次からはそのような失態を犯さないようにしよう。

歩けなくなる手前ギリギリまで痛めつけられた体は後々、痛みが残らないように手加減してくれているそうだが、それって何て言う拷問？　と思った俺はきつと間違いじゃない。絶対に。

「あ、尚也さん！」

「おっと。なのはちゃん。お風呂上がり？」

「はい！」

テテテ、と音が似合うようにこちらに向かってくるのはちゃん。既に服はパジャマに着替えてある。女の子らしい可愛いパジャマだ。思わずそんなのはちゃんを眺めていると、俺の両肩に置かれた士郎さんと恭也さんの手が圧力をかけてきて、美由希の指が俺の尻を勢いよく抓り上げた。

痛いっ！？　痛いってっ！？　別に欲情とかなんとかしてませんからね！！　ロリコンって、違う！！　美由希、だから俺は違うって言ってるだろ！！　ほら、恭也と士郎さんの睨み付ける瞳の殺気が濃度を上げてるからっ！！

「尚也さん、お願いがあるんですけど良いですか？」

「ナニカナ？」

声が裏返りそうになるのを必死に堪えながら、極めて平常になのはちゃんに接する。これでバレようものなら、叱られた三人の胃によろしくない視線が最高潮に達する事は間違いないだからだ。ならば、今この責め苦を耐えた方がまだマシ…！

「あの、耳掃除してもらって良いですか？」

「耳掃除…？」

あ、いたたたっ！！ 圧力がっ！ 殺気がっ！ 濃度を増してる
ってっ！？ くそう、どんだけアンタ等なのはちゃん可愛いんだ
っ！！ 美由希なんてお前、なんで悔しそうに唇噛んでるんだよ、
そんなに悔しいなら申し出れば良いじゃないかっ！

恭也もそんな今にも血涙を流しそうな勢いで睨むなよっ！！

士郎さんに到っては表情が消えかけてるから！！ かろうじて引き
攣った唇が笑みに見えてるだけだからっ！！

しかしっ！ これはチャンスだ……！！ なのはちゃんの傍にいれ
ば直接的なダメージは三人は与えられない。そのまま見送って貰っ
て即効逃げれば俺の勝ちだっ！！

「お、俺で良ければ」

「はいっ！！」

嬉しそうに返答するなのはちゃんに俺も色んな意味で嬉しくなる。
そしてようやく鬼神三人から解放された俺はソファに座り、そし
て俺のふとももの上に寝転がるなのはちゃん。

……これって原作ファンとかの方々がこう二次創作的に俺を見て
いると考えるとかかなりの殺意を以て俺を見ているんだろうなあ、と
どこかぼんやりと思いつながら耳かきを手に取る。

…耳かきねえ。やった事ないから上手くやれるかどうかわからん。
でもなのはちゃんがやって欲しいと言うならまあ、断るのも気が引
けるし。

「痛くない？ なのはちゃん」

「はい、大丈夫ですよ」

やたらとご機嫌なのはちゃんの声に混じって齒軋りのような音が聞こえたのは無視無視。慎重になのはちゃんの耳が傷付かないように俺は耳かきを動かして耳を掃除していく。

あらかた取り終わったのを確認した後、僅かに残っていたカスを発見。だが耳かきで取れるような大きさじゃない。

(…んー？　そう言えば…)

耳かきをしてやった経験は無いが、してもらった経験ならある。最後は確か、軽く息を吹きかけて終わりだったか。

確かにこのカス程度なら息を吹きかける程度で吹き飛びそうだ。そう思えば即実行。軽く息を吸って、息を吹き付けた。

「ひゃっ」

…………濃密な殺意が俺の胃に穴を開ける寸前まで持っていたぜ。

恭也、そんな静かな表情でコーヒーを飲んでいるのは良いんだが、何故そのコーヒーカップを持っている手が震えているんだ？

美由希、口元が引き攣ってるし、今にも手に持っているコップが割れそうだぜ？　ジュースを零したら掃除とか大変なんだから割るなよ？　手、怪我するし。

士郎さん。一見なんとも無いように見えるけど僅かにギリギリ、って音が聞こえてますからね？　いや、故意じゃないんです。本当に。

「ご、ごめん。なのはちゃん。びっくりした？」

「ちよっと…でも大丈夫ですよ。あとは反対の耳ですよね？」

「あ、ああ」

そう言って俺の膝の上を四つん這いで移動し、逆側の耳を上に向けてるのはちゃん。俺の目の前を通り過ぎる際にシャンプーの香りなのか、良い香りを嗅ぐこととなり、色んな意味でクラクラしてくる。

俺はロリコンじゃない…が、もうどう見たって弁明しようがないよね。くそう…。逃げられるかな？ 逃げられないだろうなあ…はあ。

この後、この僅かな時間が終わった後に来るだろう地獄の時間を思い浮かべ、俺は諦めたように溜息を吐きながら俺はなのはちゃんの耳の掃除に専念するのであった。

…その後どうなったかって？ 俺は高町家にお泊まりコースだったよ。…もう、わかるだろ？ 現実って辛いよな…。

* * *

その数日後の事だ。その日は日曜日。俺となのはちゃんと一緒に海鳴市を歩いていた。時刻はだいたい昼をちよつと過ぎた頃ぐらい。何故俺がなのはちゃんと一緒に歩いているか、というと、なのはちゃんが本を読みたい、と言ったのが切欠。が、高町家にある本でなのはちゃんが読めそうな本はほとんど読破してしまっていて、読む本が無い、という事に。

ならば図書館に行けば良いじゃないか、と思い、俺が提案したところ、なのはちゃんも興味が湧いたらしく、図書館に行くことになった。その日は高町家が営む「翠屋」が忙しいらしく、恭也先輩も美由希も駆り出されていた。そのため高町家には俺となのはちゃんだけ。

事前に桃子さんに連絡を取って、なのはちゃんを図書館に連れて行って良いかどうかを確認して、了承を取る。了承を取れば俺たちは家の鍵を閉めて、こうして図書館への道を歩いているのだ。

「尚也さん、尚也さんはどんな本が好き？」

「本か……。小説かな」

「小説？」

「文字だけだし、漢字もいっぱいだからなのはちゃんにはちよつと早いかな？」

ぽんぽん、と頭を撫でるとなのはちゃんは少し嬉しそうに笑う。頭を撫でられるだけでこんなに嬉しそうにするだなんて、なんか少し可哀想に思う。だが最近では恭也先輩や美由希もよく撫でているのを見かけるし、いずれは「子供扱いしないでください！」とか言っ嫌がるようになるのかなあ、と思うとちよつと苦笑。

なのはちゃんは早熟な子供だ。空気を読めるし、他人を思いやる事が出来る。だが過去の経験故なのか、あまり我が儘を言う事が少

ない。本人が我が儘だと思って聞いた事でも、俺や士郎さん達からすれば「なんだそんな事」と思うような事が多い。

自分に無頓着、そして他人を気にしすぎる。そんな子は少し悲しいと思う。我が儘を言える時期に言えないというのは悲しい事だと思う。それを我慢しなきゃ、と思っっているなら尚更のこと。なのはちゃんと接するようになって俺は本当にそう思う。

さて、そんなこんな考え事や、なのはちゃんと話しているうちに図書館に到着、っと。

「じゃ、探そうか？」

「うん」

中に入ると結構デカイ図書館で圧倒される。図書館は転生前はあまり利用していなかったが、転生後は図書館に入る事は比較的多かった。ここは俺が以前住んでいた場所の図書館よりも立派で大きな、と感じる。

そんな事を思いながら俺はなのはちゃんの手を引いてなのはちゃんが読めそうな本を探す。童話、児童向けのコーナーはどこかな、と思いながら視線を巡らせている時だった。

「彼女」が、目に飛び込んできた。

そう、その衝撃はなのはちゃんと出会った時と似たような衝撃。思わず、足を止めてその少女を凝視してしまった。

茶髪のショートカット。髪につけた髪飾り。本を手に取りろうとしているのか、必死に手を伸ばしている。だが届かない。何故ならば…彼女は車椅子に乗っており、立つ事が出来ないからだ。

(…八神…はやて?)

そう、彼女は「高町なのは」と同じ「原作キャラ」。その姿を見た俺は嫌な汗が背中に浮かび出てくるのが感じる。

そうだ。確か、八神はやては一人暮らしでその暇つぶしによく図書館を利用していたのだ、と。つまり、本来なのはちゃんが興味を示す事が無かっただろう図書館行きが、俺というイレギュラーで歪み、ここで今、八神はやてと遭遇してしまう可能性が生まれた。

どうする？　と思考は巡る。もし最悪、ここで二人が出会ってしまったらどうなる？　それは原作にどういう影響を与える？　ジュエルシードは？　闇の書は？　なのはちゃんは？　どうなってしまう？

わかる訳が無い。そう、未来の事なんて何一つわからない。俺がなのはちゃんと出会い、悩み、そして出した答えがそれじゃないか。：だったら、今、車椅子で必死に手を伸ばしている彼女を放っておくべきなのか？　見ぬ振りをして、原作に、起きるかどうかもわからない未来を理由に放っておくのか？

うなり声のような声をあげながら必死に手を伸ばして、本を取ろうとしている八神はやて。ああ、だがその手は届く事はないだろう。立てないのだから。

なのはちゃんと出会って、俺は思っただろう。なのはちゃんの悲しみが少しでもなくなれば良い。笑ってくれば良い。そして、俺はなのはちゃんが笑って良かったと思った。あんな苦しい思いをして、笑えないのは可哀想だろう、と。

同情かもしれない。ああ、なのはちゃんの時にも思ったな。だったら、今回も同じだ。

「よっ、と」

「わっ」

見過ごす、なんて選択肢は俺には無い。

「これ、取りたかったんだろ？」

そう言って、俺は笑いかけた。茫然とこちらを見上げてくる八神はやてに向けて。

—Side out—

*
*
*

—Side はやて—

ビックリした。それが一番最初の感想。

私は本を読むのが好き。せやから図書館に足を運ぶ事はしょっちゅうある。足が動かへんから本を読むしかないから。好きやから良いんやけど。

だけど、読みたい本が手の届かない所にある。うんと手を伸ばしても届かない。うう、足が動かへんってやっぱり不便やな。

そう思って、諦めようと思った時やった。横からすっ、と伸びた手が私の取ろうとした本を取って、私へと差し出してきた。

驚いて声をあげてしまったが、見上げてみれば、そこには笑みを浮かべて本を差し出してくれるお兄さんがいた。

「これ、取りたかったんだろ？」

「は、はい…あ、あの、ありがとうございます！」

「いいよ。気にしないで」

お礼を言うと、お兄さんは本当に気にした様子もなく笑っていた。驚いたけど、嫌な感じはしない。優しい人やなあ、と思い、ふとお兄さんの方へ視線を向けると、お兄さんと手を繋いでいる、私と同じ年ぐらいの女の子が目に入った。

「妹さん、ですか？」

「え？ ああ、違うよ。知り合いの人の子供さんだよ」

「あ…た、高町なのはです」

私が問いかけると、お兄さんが少し驚いたような顔をした後、苦笑のような表情を浮かべて彼女の関係を教えてくれる。するとお兄さんと手を繋いでいた女の子が名前を名乗る。

なのはちゃんかー、良い名前やな。花の名前から名前を取ったんやろうか？　と思うが、自分が名乗っていない事に気付いた。あかんあかん。

「私は八神はやてや」

「はやて…ちゃん？」

「うん。なのはちゃん」

名前を呼び合うと、何となくどちらからでもなく笑みが零れてきた。それはなのはちゃんも同じようで、少し照れくさそうに笑っている。んー、なんか可愛い子やなあ、この子。思わずそう思ってしまう程、なのはちゃんの笑顔は可愛かった。

「それで、お兄さんは？」

「俺？　ああ、俺は工藤尚也だよ。はやてちゃん」

よろしくね、とお兄さんは言う。それに私もよろしゅう、と返して笑みを浮かべた。

これが私と尚也さんと、なのはちゃんとの出会いやった。

第1章「metamorphosis／変異する世界」 02

—Side 尚也—

俺の目の前では2人の少女が楽しげに会話している。一人は高町なのは。一人は八神はやて。

本来「リリカルなのは」というアニメで登場した将来の「魔法使い」。八神はやてに到ってはかなり偉い役職に就いていたような…。そんな色々な意味で凄いと云わざるを得ないような未来が待っている少女達と俺は出会ってしまった。嘆く訳ではないが、戸惑いはある。

だがその戸惑いはもう振り切った。考えても栓がない。ここがアニメと同じ世界だからといってアニメと同じく世界が動く可能性なんて100%じゃないんだ。開き直りのような気もするが、そう思わなきゃやってられない。

俺の所為で歴史が変わった。そして最悪の未来が待っていた。そう思ってしまったら俺は絶対に生きていけない。いや、だが死ぬる気もしない。未来永劫、俺が死ぬまでずっとそういう苦しみを抱え続けなければならないんだと思う。

忘れられるものなら忘れてしまいたい。未来なんて知ってる方がおかしいんだ。そもそも未来がアニメ？ 笑うしかない。俺は何かの主人公にでもなったつもりか？ 冗談じゃない。自分は平凡だ。ただちょっと特殊なステータスがあるだけでスタート地点が同じだったら凡人止まりでしかないんだ。

その凡人が世界を救う？ 未来を変える？ 誰かを救ってやる？
夢を見るのも大概にしておけ、と俺は言うだろう。俺には絶対に
言えない。臆病だとか言われたって構わない。そんなの俺には抱え
きれないんだ。

：だからと言って、俺はこの2人の少女と出会った事を後悔する
事は出来ない。そんな事を後悔しても何もならないし、どうしよう
も出来ない。しかも出会わない方が良かった？ 八神はやての境遇
を知って、俺はそんな事を言えない。足が動かない。だから友達が
居ない。家には一人。家族が出来たかと思えば、すぐに死んでしま
うかもしれないという悲劇。

俺には、何も出来ない。出来る事なんざ1つもない。出来る事な
んて、精々、手を差し伸べて本を取ってやるぐらいだ。生活の援助
が出来る訳でもない。孤独を埋める為に一緒に住むとか、引き取る
とか、そういう事が出来る訳でもないし、例え出来たとしても上手
く行くのかわからない。というか無理だ。

俺は所詮ガキだ。無力なガキだ。転生して子供が無力だったのは
嫌でも知る。そしてそれがどれだけ気楽な事か知っている。力には
いつだって責任が付きまとう。武力だろうが、知力だろうが、権力
だろうが、何だって責任は付きまとう。

：どうして俺はこんな責任を負ってしまったんだろう。未来を知
っている、というこの責任を。死ぬかもしれない人を放っておく事
しか出来ず、ただその死を知っているが故に苦しまなければならな
い。

「尚也さん？」

「ん…？ おっと、なのはちゃん、どうした？」

「なんかぼう、としてたから…大丈夫？」

「あ、ああ、大丈夫大丈夫」

…本当、どうしたら良いんだろうな。何が正しくて、何が間違いののか、俺の未来もわかってしまえば良いのに。原作だったら少なくとも悪くない結末には到っていた筈だ。確かにいなくなった人もいた。それでも…彼女達は胸を張って生きていた。

その結末を更に良く出来る自信なんて無い。…ああ、例えば俺が魔法世界に生まれて幼少の頃から努力して、魔法が使えたらこんな事で悩まなかったのかも知れない。ただ真っ直ぐになのはちゃん達を救おう、手助けしよう、って頑張れたかもしれない。

だけど…俺は高校生で、少し未来の可能性を知っているだけで、金も無ければ権力も無い。何も出来ない。何もしてやれる事なんて無い。精々、こうして遊んであげるぐらいしか出来ない。そして、それに意味はあるのか？

「尚也さん？」

「…っと、ごめん」

考えるな。今は止めよう。今は…考える時じゃない。不安そうにこちらを見てくるのはちゃんを顔を見ながら思う。何気ない、いつものように。日常がそこにあるように振る舞う。それがきつと、今、少なくとも俺に出来る事だろうから。

＊ ＊ ＊

―Side　なのは―

図書館に来て、私ははやてちゃんという女の子と出会いました。はやてちゃんはとても優しく面白い子です。いっぱい本を知っていて、幾つか面白い本を教えて貰いました。

学校も同じ「私立聖祥大学付属小学校」で驚きました。クラスが違うので会った事が無いだけでした。

はやてちゃんは足が動かないから友達があまりいない、と聞いかわいそう、と思いました。けどはやてちゃんは良い人だから友達になりたい、と思いました。そう言ったらはやてちゃんは驚いた顔をしてました。でも、それから本当に嬉しそうに笑ってくれました。

そうして私ははやてちゃんとお友達になりました。はやてちゃんは図書館に居る事が多いから、また来ようと思いました。そう、尚也さんに言ったら尚也さんは返事をしてくれなくて、どこか遠くを見ていました。

何か考え事をしているようで、何度か呼びかけてから気付いてくれました。だけど、またすぐに何か考え事をしているようで返事をしてくれません。

たまに尚也さんはこんな顔をしている。まるで痛いのを我慢しているような顔。私は：そんな顔は見たくありません。

でも、どうしたら良いかわかりません。尚也さんは：どうしてあんな顔をするんだろう。

帰り道、はやてちゃんに手を振って私と尚也さんは図書館を後にしました。尚也さんは楽しかった？ と聞いてきました。私は楽しかった、と答えたら、尚也さんは良かったね、と笑ってくれました。その笑顔が優しいから好き。お兄ちゃんの笑った顔も好き。お姉ちゃんも、お母さんも、お父さんも。私は笑った顔が好き。その顔を見ていると私も笑いたくなるから。だから大好きな笑顔がそこにあって嬉しい。

笑って欲しい。ずっと、ずっと。もう：悲しい顔は見たくないから。だからどうすれば良いのか私は考える。どうすればもっと笑って貰えるかな、って。尚也さんと手を繋ぎながら私はずっと考えていました。だけど、どうすれば良いかはわかりませんでした。

— Side out —

* * *

—Side はやて—

今日はビックリしたなあ、だけど嬉しかった日や。なのはちゃん、
っていう友達が出来たし。尚也さんって言う優しいお兄さんにも会
えたし。ええ人達やったなあ、ホンマに。

そこでふと、私は図書館の時計を見た。時計はそろそろ閉館時間
になろうとしていた。私は車椅子を押して移動していく。借りたい
本だけ膝の上に乗せて車椅子を押していく。そして受付までやって
来る。

「あら、はやて。今日はそれを借りていくの？」

「うん！」

「あら、今日は何か良いことあったの？」

「うん、今日な、なのはちゃんっていうお友達が出来たんやっ!!」

「あら! お友達が出来たの。良かったわね」

「うん！」

優しい手つきで私の頭を撫でてくれる手。私の大好きな手。私の
大好きな声。

「じゃあ、帰りましょうか。はやて」
「はい、お母さん」

私の後ろに回って車椅子を押しながらお母さんと私は家への道を行く。夕日が沈んできて空が暗くなっていく。私はこの景色が好き。お母さんと一緒に帰れるこの道が好き。図書館の司書をしているお母さんが仕事を終えて、こうして一緒に帰るのが好き。

「今日は、なのはちゃん、だっけ？ その子とどんなお話したの？」
「えっとな、どんな面白い本の事とか！」

「ふふ、はやては本が好きだものね」

「うん！　せやからいっぱい面白い本を教えたんや！　そしたらなのはちゃんも喜んでくれたんよ！！」

「そう、良かったわね」

今日会った友達の話すとお母さんは嬉しそうな顔で笑ってくれる。それが嬉しくて私も笑って話す。今日会った事、今日読んだ本の事を。いつもの大好きな帰り道は、いつもよりもっともっと楽しかった。

＊ ＊ ＊

—Side 尚也—

月曜日、まあ、つまりなのはちゃんと図書館に行った次の日、学校に行ったら凄い事になった。女子からは凄い嫌悪の視線が飛び交い、男子からは畏怖と尊敬の眼差しを向けられた。一体どういう事なの…？

「アンタが昨日、2人の幼女を侍らせた事が原因ね」
「冤罪だああああああああっ！！」

隣の席の女子に真相を話され、俺は叫んだ。だがその叫びも最早、意味を成さない。これからの俺のあだ名は「ロリコン」に決定された。そこから更に派生して「ロリコンキング」だの「ロリコンマスター」だの、ロリコンにちなんだあだ名が蔓延した。

それだけならまだ良い。そう、それならば馬の耳に念仏の如く聞

かなかった事にしてしまえば良かった。：良かったんだ。

俺は全速力で廊下を駆け抜けていた。正にその様は疾風の如くである。今なら100m走でオリンピックを狙えるかもしれないスピードで走っている。だがそのスピードと変わらないスピードで追いかけてくる男がいる。無論、あの人だ。

「うおおおおっ！！ 校内でも追っ掛けてくんناよ恭也あああ
あっ！！」

「俺は貴様の事を見誤っていたようだ：！！ なのはだけじゃなく、罪の無い女の子を毒牙にかけていくお前を俺は許さん：っ！！」

「だから冤罪だって言ってますよねっ！！ 俺にそんな気はなああ
あああいつっ！！」

校内でも恭也にサーチアンドデストロイされました。まったく、原作だったらもっとまともというか寡黙な人だった筈なのにどうしてこうなった？ 何があっただよ、本当に。何でこんな目の敵にされてるわけ？ 泣きたい：。

そして昼休みを追いかけっこに費やした俺は午後の授業は死んでいた。だが教師は厳しかった。何故だ、俺が一体何をしたというのだ。ただ知り合いの女の子を図書館に連れて行っただけなのに：。

そんな事を思いながらの帰り道。あのスコン兄さんに見つからないようにビクビクしながら裏道を通って帰ろうとする。今日は大人しく家に帰ろう、と家路を急ごうとする。帰宅時間を伺って学校内を徘徊していたらもう遅くなっていた。

夕暮れに染まっている空を見ながら俺は思う。何やってんだろうなあ、と。別に今の生活が楽しく無い、とは言わない。だが、このままで良いのか、というのはある。今の俺はきっと中途半端だ。何か出来るか、って悩みながらも、何も出来ないと諦めて、どっちつ

かずの態度でいる。

きつと、このままじゃいけない。かといって何をどうすれば良いかなんて頭に浮かばない。このまま何事も無ければ一番良いのだが、起きないなんて断言する事も出来ないし、起きるかも知れない、としか言えない。

そんな曖昧だから、手が出せない。足が竦んで、迷って、こうして今のどっちつかずの態度でフラフラしている。どうにかしなきゃ、と思ってもしようもない出来ないでいる。本当に、まったくもってどうしようもない、と溜息を吐く。

「あ、尚也さん！」

「あれ？ はやてちゃん？」

ふと聞こえた声に俺は振り返った。そこにははやてちゃんが居た。何故此处に？ と思うが、そういえば図書館はもう閉館時間だ。確かにもう帰り始めていてもおかしくはない。だからこそこうして偶然出会ったんだろう。

そこで俺は視線がはやてちゃんの車椅子を押している女性に目が向いた。肩にかかるぐらいにまで伸ばした髪。穏和そうな優しい顔つき。あれ？ と思った。ふとははやてちゃんに視線が向き、女性へと向ける。そして感じた感想は、似ている、という感想。

「あら、知り合い？ はやて」

「うん！ 昨日、なのはちゃんと一緒に来てたお兄ちゃん！」

「あら、そうなの。…ウチのはやてがお世話になりました。ありがとうございます」

「え、あ…いや…え…？ もしかして…お母さん…？」

「はい。八神 渚です。昨日は本当にありがとうございました。はやても凄く喜んでくれたので…」

「い、いえ…」

俺はそう返答を返すのが精一杯だった。母親？ 八神はやての母親は、死んだはずじゃ？ …いや、待て。そもそも俺はやてが原作開始時には天涯孤独になったのは知っているが、いつから天涯孤独になったのかは知らない。

少なくとも9歳になる前からはいなかった筈だ。だが、つまり、それは：「まだ」死んでいない、という事なのか？

ぐるぐる、ぐるぐる思考は巡る。だが、それでもそれを表情に出さずに返答するので精一杯。混乱なんかしている所を見られたら絶対変な目で見られる。俺は怯えるように心を震わせながらも平静を装い、はやてちゃんと、その母親の渚さんを見送り……逃げるように走り出した。

「ちくしょうっ、ちくしょうっ！！」

どうすれば良いのかももうわからなかった。原作だとか、どうかもう滅茶苦茶になって頭をぐちゃぐちゃにする。思考が纏まらず、俺は込み上げてくる吐き気に堪えながら家に駆け込み、鍵を閉めて洗面所で吐いた。

ざー、と水が吐き出したものを流していく音を聞きながら、俺はただ震える事しか出来なかった。まだ、死んでない。だけど、死ぬかも知れない。

…そうして俺は、本当の意味で逃げる事が出来なくなってしまったのだと言う事を知った。全てを無かった事にするのは…もう、

遅すぎたのだと。

—Side 尚也—

時間はいつの間にか流れていた。俺がどのように過ごしてきたのか、あまり覚えていない。だが、いつも通りに振る舞おう。ただ、そうしていたような気がする。

季節は気付けば秋になっていた。空気が冷たく、防寒具が無ければおちおち外にも出られない。そんな肌寒い空の下、俺は公園のベンチに座ってぼんやりと空を眺めていた。

寒さに鳥肌が立つ。ジャンパーの袖を上げればそこには栗立った肌が見える。だがそれでも俺はこの寒い外の中でぼんやりと何かを見ていた。その公園は…恐らくだが、将来、本来の歴史を辿れば「リインフォース」が消えるだろう公園。

ここが本当にそうなのかわからない。だが、何となくここっぽいという曖昧なもの。公園は結構高台にあるが、緩やかな坂で道も整備されている。散歩には最適、車椅子でも上れない事もない高台。

リインフォースが消える時の瞬間。確か、そんな感じだったよな、と曖昧な記憶を掘り返す。覚えていられないものはノートに書き写そうとして、ほとんど印象に残った事しか覚えていなかった。

ここ、海鳴市にジュエルシードという危険物が漂着する。なのはちゃんがユーノ・スクライアとの出会いによって魔法の力を得る。そしてフェイト・テストロッサとの争い。管理局の介入、そしてプレシア・テストロッサから告げられるフェイト・テストロッサの出

生。

時は流れ、冬。ヴィータの襲撃に遭い、倒れるのはちゃん。カードリッジによって強化されたデバイス。グレアムという男による闇の書の封印の為の暗躍、クリスマス。消える騎士達に暴走するはやてちゃん、リインフォース。そして：防衛プログラムとの戦い。リインフォースの消滅。

そして舞台は10年後。その間になのはちゃんが撃墜し、大怪我を負う。だがそれを克服した後に始まる”レリック”を巡る戦い。ナンバーズ、ヴィヴィオ、機動六課、地上本部陥落、聖王のゆりかご…。

後もまだストーリーは続いたような記憶はあるが、もう、覚えていない。特にストライカーズ、つまりなのはちゃん達が19歳になる時に発生する事件は本当に大まかな事しか覚えていない。詳しい事件などもう忘れた。

これからの事。プレシア・テストロッサが死に、リインフォースが自己消滅し、なのはちゃんが大怪我を負い、そして、数多くの人が死んでいくだろう。俺の知らない所で、だけど俺の知っている未来で死んでいく人が数多くいるだろう。

胃が引き絞るような痛みが走る。すぐさまポケットに入れていた胃薬を服用し、痛みを堪える。胃潰瘍かね、コレ、と思いながらはあ、と力を抜くように溜息を吐いた。歯を噛み締めてないと口からとんでもない悪態が飛び出そうで堪える。

吐き出せる場所も吐き出せる人もいない。ぐるぐる、思考だけが巡る。正直、それに疲れてきた気がする。時折、刃物を握っていると手首に持っていきたい衝動にかられる。たまに当てようとして、すぐに思いなおして刃物を置く。

そのためか最近まともな食事を作っていない。高町家に招かれた時にしかまともなものを食ってないだろう。：そもそも、胃が受け付けない。高町家にいる時は何とか精神力で持たせているが家に帰ると吐いている。まったくもって仕様もない。

かといって病院に行く気もしない。いや、そもそも行けない。俺は普通じゃなきゃいけない。心配させてしまうような事をしてしまふ訳にはいかないんだ。俺が崩れてしまった日常を、もうこれ以上崩してしまう訳にはいかない。もっと良い方向に。もっと、もっと、誰かが笑っていられるような光景にしなきゃ。

「…やっぱり、当面は渚さん、か」

八神渚。八神はやての母親で：将来、死ぬ可能性のある、いや、ほぼ確実何らかの要因で死ぬだろうその人。彼女は元々、この海鳴の生まれらしく、関西出身の旦那さんと結婚して今に至るらしい。はやてちゃんが関西弁なのはそういう経緯があるからなのだろう。

容姿は母親、中身はどちらかというと父親似らしい。だが、はやてちゃんの将来の強かさや、ヴォルケンリッターを受け入れ、家族のように接したあの優しさはおそらく渚さん譲りだと思う。

陽気な所は父親から、優しさは母親から。本当に良い部分をはやてちゃんは継いだんだな、と俺は思う。本当に良い子で、良い両親で：これから死ぬって知らなきゃ、本当に良い家族だな、って見てられたんだと思う。

そう見られたら：俺はどれだけ幸せだったんだろう。何も知らないまま、この海鳴市に來れたら：。

だが、それはあり得ない。俺が転生者だから俺はここにいます。だから、何も知らないまま出会う事は無かった。そう、その可能性は絶対にあり得なかったのだ。

「…やべ、もうこんな時間か」

もう時間は遅い。外にいるには本当に遅すぎる時間だ。外灯が街を照らし、空には星や月が浮かんでいた。もうそろそろ帰らないと、俺は体を起こす。冷えた体は擦っても暖まりそうにもない。これは早く帰って布団に潜ろう、そうしよう、と。

緩やかな坂を早足で下り、自分のマンションを目指す。足取りは軽くもなく、重くもなく。ただいつもの歩調だ。時折吹き付けてくる風に目を閉じて堪える。思った以上に外に居すぎたか、と歩いていく。

「あれえ…？ 尚也くんだあ…？」

「え？ …渚さんに…」

ふと、背後からかけられた声。その声に振り返ればそこには渚さんが居た。普段のどこか落ち着いた様子とは異なり、頬を朱に赤らめさせ、どこか足取りがフラフラとしている。陽気そうな声は明らかに酔っている事を示している。

その隣には見たことのない男性が立っていた。彼は渚さんに肩を貸しているような状態にいる。

「なんや、知り合いか？」

「うんー、はやてとよく遊んでくれるお兄さん、だよねー？」

「え、あ、はい…」

「ああ、君が噂の尚也君か。はやてにロリコン言われてる」

「はやてちゃん…」

あの耳年増め、と小さく悪態を吐いた。まったく、一体どこからそういう言葉を仕入れてくるんだか……。図書館か？ 一度調べてみておいた方が良くもしいないな、と思いつつも、俺は何となく、渚さんに肩を貸している人が誰だかわかった。

「…はやてちゃんの、お父さんですか？」

「ああ。八神翔って言うんや。よろしゅうな」

翔、と名乗った男性は、渚さんを支えていない片手を差し出して握手を求めてくる。俺も少しそれに戸惑いながらも握手を返すと、彼は陽気に手をぶんぶんと振ってくる。酒も入っていて恐らく陽気になっているからだろう。まさか、普段からこのテンションだとは思えない。

しかしどうしたものか。声をかけられてしまって、このまま素通り、というのも何だか退ける。だが握手されているためになかなか抜け出せない。どうしようか、と考えていると渚さんが俺に手を伸ばしてきた。

「また」

「え？」

「尚也君はいつも難しい顔だねー、眉間に皺がいつぱいだー…」

眉間を解すかのように伸ばされた指に俺は何も言えなかった。渚さんは恐らく絡み酒のタイプの人なのだろう。普段の落ち着きはどこへ行ったのか、どこか子供っぽい仕草で俺の眉間を解している。そんな俺の眉間はいつも寄っていただろうか、と俺が考え込

うとした瞬間だった。突如、渚さんがふらついて、俺によりかかる。翔さんも咄嗟の事で反応出来ず、少しバランスを崩していた。

「あ、な、渚さん？」

どうしたのか、と思いながら渚さんの顔を覗き込んで――脳裏に警報が鳴った。

顔が青い。マジで青い。本気で青い。これは、つまりあれだ。理解はしたくないが、既に最早カウントダウンは非情にも始まっていた。

それに翔さんも気付いたのだろう。それは不味いと思って渚さんを俺から引き剥がそうとして――――。

＊
＊
＊

「ほんっ…まにすまんっ!!」

「いや、その、大丈夫です。ははははは…」

現在、俺は八神家にいる。俺は上着を脱いだ状態にいる。その前

では拝むように両手を合わせて平謝りしている翔さんがいる。ソファーでは顔色が大分良くなった渚さんがすうすう、と寝息を立てて眠っていた。

俺のジャンバーは現在洗濯中。まあ、不可抗力だし仕方ない、と思っておこう。それに酔っぱらいに怒ったって仕様がなない。それよりも気になったのは、あの渚さんがあそこまで酒を呑むイメージが無かった事か。

「渚さん、酒飲みなんですか？」

「…いんや、弱い癖にストレスが溜まるとすぐに酒に逃げる癖があつてなあ、俺もたまに付き合わされてこないな目に遭うんや」

「…はあ…」

「いや…ほんま、運悪いな、尚也君やったつけ？　ほんま、すまん…。色々世話になつて話聞いているのになあ」

「あ、いえ…別に」

気にしてないです、と俺は手を振って返す。それから俺は帰ろうとも思ったが、ジャンバーが無ければ、もう時間も遅い、という事で泊まっていけ、と言われてしまった。だが、あまり面識の無い人だ。大丈夫、と言ったがあっちもあっちで粘り、結局俺は八神家にお世話になる事になった。

「まあ、部屋は余ってるさかい、好きに使ってくれや、今、布団用意するわ」

「あ、はあ…」

そう言い残してリビングを後にする翔さんを半ば茫然と見送る俺。なんだか申し訳ないな、と思っているとソファの方から呻き声が聞こえ、俺は振り返った。そこには頭を押さえながら起き上がろうとしている渚さんの姿がある。

渚さんは頭が痛いのか、あなた、お水うー、と眼を固く瞑りながらと苦しい声で言う。流石見てられなかったので、適当なコップを拝借し、それに水道の水を汲んできて渚さんに手渡す。コップを受け取った渚さんは水をこくこく、と勢いよく飲み干していく。

「ふう…ありがと…って、尚也君!？　　つつたあっ…!!」

「あ、頭に響きますよ？　　そんな大声出さなくても…」

「…え？　　あれ？　　何で尚也君がウチに…?」

二日酔いの痛みで涙目になりながら渚さんが問うてくる。それに俺は今頃、洗濯中のジャンパーを思い出したが、一応、伏せておこるか、と愛想笑いを浮かべる。

「あ、あははは…ちょっとぼう、としてたら凄い夜中になってしまってます。そしたら渚さんと翔さんに出会って、それでちょっと話してたら、翔さんが危ないから泊まっていけ、って」

「あれ…そうなの？　　こんな夜中になるまで、また考え事？」

「…そんなに、俺、考え事してるように見えます？」

先ほども渚さんは俺に対してそう言った。なら俺はそんなに考え事をしているような顔をしているのだろうか？　　そんな疑念を抱きつつ俺は渚さんの答えを待った。渚さんはうーん、と唸るような声

を上げながら眉を寄せている。

「…考え事、というよりは、何か、我慢してるみたいなのかな？」

「…我慢？」

「うん。私と話してる時によくそんな顔してるし、はやてとなのはちゃんと一緒にいる時もそんな風な顔してた。…まるで何か辛い事があるみたい」

「…っ…」

「私は…はやてを育ててきたから。そういうのにも元々、敏感なんだけど…わかつちゃうんだよね。ああ、この人は今、凄く苦しんでるんだなあ、とか」

ソファーに横になりながら、渚さんは噛み締めるように呟く。腕で目元を隠すように乗せ、気怠そうな溜息を吐き出している。いつもは見えないような渚さんの姿に俺は思わず驚くばかりだ。

いつもどこか穏やかな顔をして、優しい雰囲気を感じていた渚さんのこの姿がとても俺には意外に見えたのだ。今の渚さんはいくつもより小さく見える気がする。消沈しているにも俺には見えた。

「…：んー、やっぱり記憶無いなあ…また飛んじやった、か。凄かったでしょ？ 私、お酒弱いからさー、よくベロンベロンになっちゃってさあ…」

「…は、はあ…」

「あ、尚也君、高校生だったね。ごめん、こんな話しても、困るだけだよ…」

「…何か、嫌な事でもあったんですか？」

何気なしに俺は問いかけていた。その俺の問いかけに渚さんは動きを止めた。口元に浮かんでいた笑みは引きつったかのように震え、唇が震えたかと思えばすぐに閉ざされ、歯を噛んだかのようにムツ、とした口元となる。

マズイ、と思ったのは遅かった。俺は多分、聞いてはいけない事を聞いてしまった気がする、と。俺は渚さんを見つめる。渚さんは…閉ざした唇をゆっくりと開いて、重たい息を吐き出しながら呟く。

「…疲れちゃった」

「……え？」

「……お母さんなのに…疲れちゃった」

それだけ。たった…それだけの一言。そこに渚さんの思いが詰まっているように聞こえた。俺はそれに対して何にも言えなかった。リビングに翔さんが戻ってきて、布団の準備が出来た、と言われるまで俺は動く事が出来なかった…。

＊ ＊ ＊

携帯のアラームで目が覚める。6時、一度、家に戻らなければいけない為、その時間に出ると昨日のウチに告げておいたのだ。

俺は静かに音を立てぬように自分の使った布団を綺麗に畳んでから部屋を後にする。いつかこの空いた部屋はヴォルケンリッターの面々が来た時に使われるのだろうか、と考えながら。

ふと、俺は道中、はやてちゃんの眠る部屋の前を通った。そこで一度足を止める。

「……」

ごくり、と俺は息を呑む。恐らく、と俺の思考はある1つのものを思い浮かべていた。少し俺は迷ったように……はやてちゃんの部屋の扉を開いた。

少し中を覗くように俺ははやてちゃんの部屋を覗く。罪悪感が胸を刺すが、どうしても確かめたい事があった。俺ははやてちゃんが起きないようにゆっくりと扉を開き、中へと視線を向けた。

ぐるり、と部屋を見渡し、俺ははやてちゃんのものだろうか本棚へと眼が向かう。そして……見つけた。

鎖で封印されるかのように閉ざされた一冊の書。……”闇の書”がそこに鎮座していた。俺は、それを確認し、はやる心臓の鼓動の音を押さえるように左胸を掴みながらはやてちゃんの扉を閉めた。

（……確定……決定）

もう、確信した。必ず「リリカルなのは」は始まる。そして、いつかははやてちゃんの両親は……死ぬ。渚さんも、翔さんも、死んでし

もう。

未来が確定した。これから何が始まるのか、もうわかってしまった。そう理解した瞬間、ぎりぎり、と引き絞るような胃の痛みが走る。俺は奥歯を噛み締めながらポケットをまさぐった。…無い。薬がない。

（しまった…っ、ジャンパーの中…っ…だ…）

ぐるり、と世界が回った。途切れたような、掠れた吐息が零れる。壁に寄りかかってなければ立っていられない。胃が引き絞るような痛みが襲い、吐き気がこみ上げてくる。上手く呼吸が出来ない。世界が滲んで、上手く見えなくなる。

痛みは収まらない。そのまま…俺の意識は暗転した。

＊ ＊ ＊

灰色。まるでモノクロのように色が抜け落ちた世界。信号も、街路樹も、街頭も、何もかもが白と黒の濃淡で映る世界。俺は、その街をただ歩いていた。俺の意志じゃない。まるでその光景を見せられている。動いていくその風景を。

ただ俺は歩いていく。ここがどこなのかわからない。ただ、呼ばれるかのように、導かれるように俺は歩いていく。それが不気味で、俺の唇は自然と震えていた。怖い、と感じる。見えぬ、わからぬ闇の中を進んでいるような錯覚。

「――あ……」

そして、俺が見たのは、はやてちゃんだった。良かった、と思った。知っている人がそこにいる。俺は声をかけようとした。かけようとして――声が、無かった。

はやてちゃんは座っている。ぺたん、と足を地面につけるように座り、俯いている。そのはやてちゃんの前。はやてちゃんの周りが……赤い。

赤い。濃淡しか無かった世界に映る鮮明な赤。ぐるり、と胃が引っ繰り返されるような痛みが走り、俺はかちかち、と歯を振るわせ、あ、と声にならない声を吐息と混ぜながら吐き出す。

ゆらり、と幽霊じみた動作ではやてちゃんが振り返る。その頬は……血に塗れていた。俺は眼を反らした。見ていられない、と。そして……赤の正体を知った。

――渚さんと、翔さん。

ぐったりと、力なく倒れた身体。見開かれた瞳、瞳孔が開ききったその瞳は俺の背筋を嫌でも震わせる。立っていられず、俺は蹈躡を踏むように尻餅をついた。

ぬちゃり、と手に嫌な感触。いつの間にか俺の足下まで赤が広が

っついて…それは血で、俺は悲鳴を上げようとした。だが、引きつったような喉が声を出す事を許さない。歯は震え、声にもならない声が漏れる。

「――なんで」

声が、響く。

「――なんで」

はやてちゃんが、ぎょろり、と眼を動かしてこちらを睨んだ。絶対にしないような、鬼のような形相を浮かべて俺を睨んでいる。

「――なんで、尚也さん、血まみれなん？」

ぬちゃり、と。俺は身体をまさぐるように手を伸ばす。ぬちゃり、ぬちゃりと俺の全身が血に濡れているかのように真っ赤に染まっていた。違う、何だこれ、気持ち悪い！！ 吐き気が込み上げてくる。胃の中のものを全部を吐き出してもまだ止まらない。

「尚也さん…」

はやてちゃんが、口元を引きつらせた。一見、笑みにも見えるが……それは、笑みじゃない。

「――人殺し」

ひくつ、と俺の頬が引きつった。はやてちゃんから告げられた一言が俺の何かを引き裂く。そしてその引き裂いた何かの傷を押し広げようとしている。ぎちぎちと、みちみちと。音にするならそんな感じ。

痛い、痛い、痛い。苦しい、苦しい、苦しい。違う、違う、違う、俺じゃない。俺がやったんじゃない！！俺が殺したんじゃない！！俺は誰かを殺したいなんて願ってない！！俺は、俺はただ、知っているだけで…。

「人殺しだったの…？ 尚也さん」

後ろから、声が聞こえた。それはまた、聞き慣れた声で。

「なの、は…ちゃん？」

「……人殺し……」

なのはちゃんは俺を蔑むような瞳で見据えて、一步、俺から引く。その後ろには……高町家の皆がいる。誰もが俺を蔑むように見ている。そして誰もが口を開いた。

「人殺し」

「人殺し」

「人殺し」

「人殺し」

「人殺し」

「人殺し」

「人殺し」

「人殺し」

繰り返される声。耳を塞いでも脳を揺らすかのように声は響いて、俺は声を上げようとするけれど、それでも喉が引きつって声が出ない。藻掻くように俺は転がって、ふと、腹部に衝撃が走った。

俺は仰向けの状態になっていた。視線を腹の上へと向けると、俺にまたがるようにはやてちゃんが居た。人形じみた表情で俺を見下ろす。その血に塗れた顔に……冷笑を浮かばせていた。

「……かえして？」

「ち……が……」

「わたしのおかーさんとおとーさん……かえして？」

「お、れ……じゃな……っ」

「——かえしてくれへんなら……」

——なおやさんのいのち、ちよーだい？

——2かいもじんせい、やりなおしてるんやから……いいやろ？

そして、視界の全てが真っ赤に染まった。

*
*
*

「——尚也さんっ!!」

唐突に呼ばれた声に、俺は眼を見開く。映ったのは白の天井。喉が引きつったように息が苦しい。ぜえ、ぜえ、と声が漏れて、肌触りの感触が気持ち悪い。汗を掻いているからだろう。

その中で唯一心地よい温もりがあった。それを確かめるように、俺は手を握った。俺の手を誰かが握ってくれている。さっき、俺を呼んでくれたのは誰なんだろう？ 一体…誰…？

「尚也さん？ 大丈夫？」

「…はや…て…ちゃん？」

そこには心配そうな顔でこちらを覗き込むはやてちゃんがいた。彼女が俺の手を握ってくれているようだ。何で？ と頭に疑問が掠めるが、上手く頭が働かない。

「…凄い魘されとったから…悪い夢、見たん？」

「…ゆ…め？ …っ…ここ、どこ…？」

「病院や。…ビックリしたで。いきなり大きな音したと思ったら、尚也さんが家で倒れてるんやもん」

「…たお、れた？ 俺…倒れた…のか…？」

「そうやで！ 体調悪いのわかってたんならなんでこうなる前にもっと気をつけようと思わんのやっ！！」

私怒ってるんやで、とはやてちゃんが頬を膨らませて怒っている。それは本当に起こっているのだ、とわかって。それが俺を心配してくれてるのだと、わかってしまっ

——なおやさんのいのち、ちよーだい？

——2かいもじんせい、やりなおしてるんやから…いいやろ？

夢だった。あれは夢だった。そう思うと、言いようもなく涙がこみ上げてきた。ひくっ、と喉が引きつったような声をあげて震える。

「え…？ あ、いや、ちよ、尚也さん？ その、ごめ、言い過ぎたわっ！ ご、ごめんっ！！」

「ちが…っ…ごめ…っ…ひ…っ…ごめ、ん…っ…はやて…ちゃん…」

「…尚也、さん？」

「…ひっ…うっ…くっ…あっ…ああっ…！」

どうしようもなくなった苦しかった。怖かった。だから安心した。はやてちゃんの手を握りしめて、空いた片手で顔を覆い尽くして涙を堪える。ただ、緊張から抜けた安堵がそれを実感させるかのよう
に俺は震えて、涙を流した。

「…大丈夫やよ。全部、夢やから…。夢やから…安心して？ 尚也さん」

はやてちゃんの声が聞こえる。優しい声にする。夢のような冷たい声と違う声。本来のあの子の声。包むように握ってくれた手が温かくて。それを縫るように俺は握ってたただ震える事しか出来なかった。

—Side out—

*
*
*

—Side はやて—

…ビツクリした。それが正直な感想。朝、大きな音と共に眼を覚ましたら尚也さんが倒れてて、家にどうして尚也さんがいるのか、とか、そんな疑問も全部吹っ飛んでた。ただ尚也さんが心配で、無理を言っ学校を休んで、こうして病院にまで来た。

幸いな事に、尚也さんは命に別状は無い、とお世話になっている石田先生に聞いたらそう答えてくれた。ただ、倒れた理由がちよつと気になる、と言っただけ、何も教えてくれへんかった。一緒に来てたお母さんとお父さんは何か聞いてみたいやっただけ。

尚也さんの病室には入れるそうで、私は尚也さんの病室でずっと尚也さんの様子を見てた。そしたら…尚也さん、ずっと魘されてるんや。苦しそうに息を吐いて、寒くて震えるように息を吐いて、落ち着きなさそうに首を振っていた。

その様子が凄く辛そうで、私は思わず尚也さんの手を握った。すると尚也さんは凄い力で私の手を握ってきて、思わず、痛い、と悲鳴をあげてしまった。だけど、すると尚也さんが少し落ち着いたように静かになったから我慢する。痛くて涙目になったけど。

その分の怒りも込めて、私は尚也さんが眼を覚ましたら叱ってやったんや。きつと何か抱え込んで、それに苦しんでたんやろうな、って思ったから。たまに思い詰めたような顔をしとったから多分そうなんやろうな、って思っただけ。

そしたら…まるで子供みたいに泣き出したんや。尚也さん。怖くて震えるように身を縮こまらせて泣いておったんや。それが見てられなくて、私は落ち着けるように言葉を探して、ずっと手を握り続けておった。

しばらくすれば、尚也さんはまた眠ってしまった。手は繋がれたままだ。だが、さっきみたいな握力は無い。きつと離そうと思えば離してしまえる。だが、そしたらまた尚也さんが悪い夢を見てしま

うんやないか、って思うと離せなかった。

よほど怖い夢を見たのだろう。嫌な夢を見るのは嫌や。しかも、尚也さんがあんな風になってしまふなんてよっぼどの悪夢やったんやろうな、って。だから、私は尚也さんの手を握り続けてる。尚也さんが悪い夢を見ないように。いつも私に優しくしてくれた尚也さんに恩返しで、ただ、ずっと…。

—Side 尚也—

俺は前世を含めて換算しても病院に入院する経験なんて無かった。そんな俺だが、現在絶賛入院中だ。症状はストレス性の胃潰瘍。ああ、やっぱりな、と思って話を聞いてたら医師に色々聞かれた。

とは言え、話せる事でも無かったので曖昧にして誤魔化しておいたが：不味いなあ、これで虐めにあつてるとかなんて思われたら俺どうするよ？ そんな事を考えながら病室でぼんやりとしていたら高町家が面会に来てくれた。

「すまなかったっ！！」

「すまん…っ！！」

「ごめんねっ…！！」

そしていきなりのコレである。士郎さん、恭也先輩、美由希の謝罪である。もう下手をすれば土下座をしてしまうのではないか、という勢いだ。俺はそれに勿論慌てた。どうして三人がいきなり頭を下げたのかわからなかったからだ。

「ストレスって、俺達が原因だろう？」

「……ああ、そういう事ですか」

ああ、そう言えば追いかけて回されたり、プレッシャー与えられたりしたなあ、と思い出す。しかしあれは別にむしろ気が紛れてたから良かったような。ここ最近、士郎さんはあまり積極的というか干渉して来なかったし、恭也先輩と美由希の2人だったから最初に比べればそれでも無かったんだよな。

だからさしてそれが原因、と言うわけじゃない。そう説明したのだが、三人の顔からは気まずい雰囲気は抜けない。本人が気にしていないのに気にされると結構、どうすれば良いのか対応に困る。とにかくそれを説明しようと俺は口を開く。

「本当に、士郎さん達が原因じゃないですから」

「いや、しかし……俺達は尚也君と話す機会が多かったのに、気付かなかった……」

「……あー……その」

隠してましたから、と尚也は内心呟く。だがそれを知られる訳にはいかない。未来の知識、もはや確定的になってしまった未来。脳裏にそれが過ぎる度に悪夢の光景が脳裏を過ぎり、歯を噛み締める。表情に出せば気付かれる、と無表情を装うとする。

その瞬間、すっ、と伸ばされた手があった。その手は俺の手を握る。俺は思わず驚いてその手の主へと視線を向けた。

「……なのは、ちゃん？」

「…また…だよ」

「え？」

「またそんな顔してる！ どーしていつも我慢しちゃうの！ だから倒れちゃうんだよっ！？」

なのはちゃんの言葉に思わず呆気取られた。なんで気付かれた？
と思い、困惑したのを表情に出したのが不味かった。そこから高
町家の気まづげな雰囲気はまだ広がり、なのはちゃんが泣きそうな
顔を浮かべた。やばい、バレた。

ずっと今まで隠してたが、なのはちゃんには気付かれてた？ い
つから？ なのはちゃんが気付いたという事実が俺を混乱させる。
何を言えば良いのかわからない。どうすれば良いのかわからない。
話す？ 出来る訳がない。誤魔化す？ 誤魔化すと言ったってど
う誤魔化す？ 恭也達の所為にする事なんて出来ない。思考だけが
空回りして、俺は何も行動に移せない。あ、う、と意味を持たない
呻き声が漏れるだけだ。

「…俺は、本当は尚也君に感謝してるんだ」

「え？」

「…俺達、昔いろんな事があって、なのはに遠慮していた部分があ
ったんだ」

俺の手を未だに握っているなのはちゃんの頭を撫でながら士郎さ
んは告げる。感謝している、という言葉に俺は思わず呆ける。確か
に俺はなのはちゃんと接する機会が多くなり、それでなのはちゃん
も良い方向に行っていたみたいなのは知っていたが…。

まさか改めて感謝されると何だか複雑だ。俺は知っていたから。

知っていたから…なのはちゃんが一人で寂しい思いをしているのが可哀想だと思ったからそうしただけ。だから改めて感謝されても、俺はどうすれば良いのかわからない。

「…尚也君が来て、正直嫉妬してたんだな。これが」

「…それで…まあ、複雑になってな」

嫉妬、か。…まあ、どうなんだろう。それは。俺としては…簡単な問題でも士郎さん達にとっては凄く難しい問題だったのかもしれない。家族としての視点と、身内外の視点を持つ俺との違いを考えれば。

美由希はどこかチラチラと伺うようにこちらを見ているし、恭也先輩に到っては暗く、沈んでいきそうな勢いだ。そこまで気にしなくても良いんだけどな、と思う。

「…まあ、それでも尚也君に感謝しているのは変わらないんだ」

「…はあ…でも、俺は…別に」

「大したことはしてない、か？ 君はそうかもしれない。でも…俺たちにとっては凄い気がかりな事だったんだ。それを解決してくれた君には本当に感謝してる。まあ…あんな態度取ってたから、まあ、信じられないかもしれないが…なんて言うかあは、身内に近い、っていうか…まあ、言い訳だな。これは。……だけど、な。…尚也君。何か嫌な事があったり、悩みがあるなら相談して欲しいと思っている。してくれるなら俺たちは真剣に考えようと思ってるんだ。本当に」

士郎さんが俺の目を真っ直ぐに見つめながら言う。その瞳の強さ、
というか、士郎さんの気配に圧倒された。本当に心配して貰えてる
んだ、というのが肌で感じられる。それが俺を震わせた。

脳裏に過ぎる悪夢。2度の人生を歩んでいる俺。そしてこの世界
の未来を知っている。これには意味があるんだ、と思わされる。変
える為にあるのか、それとも崩さない為にあるのかはわからないが。
何の為にこの記憶があるのか。それは俺にはわからない。わから
ないから抱え込まなきゃいけなかった。だって、人の生き死にに関
わる問題だ。簡単に答えが出る問題じゃない。…だけど、それが酷
く辛い。重くて、苦しい。

「尚也君」

「…桃子さん」

「私達は皆、尚也君の力になりたい、って思ってるわ。尚也君は私
達がずっと気にしてたなのは事、解決してくれたし、私達もなの
はどう触れ合えば良いかわかった気がするの。情けない事だけど
…尚也君のお陰なの」

「そんな…俺はっ…」

「それに、貴方の両親とお友達なの知ってるでしょ？ 私が近くに
いながら倒れさせたなんて言ったら、私怒られちゃうわ。だから…
頼って？ もう、他人じゃないのよ？ 尚也君」

そっと、頭を撫でられる。その暖かさと感触に俺はただ目を見開
く。心に罅が入る様な痛みが走る。また、泣いてしまいうになる。
だがそれを堪える。泣きたくない、って思った。俺は…俺は…。

＊ ＊ ＊

「…大丈夫だよ。ちょっと悩み事があった、それでちょっと詰めすぎただから。別に虐めとかにあってる訳じゃないし、一人暮らしにストレス感じてる訳じゃないから。桃子さんも良くしてくれるし」

俺は実家に電話をかけていた。病室から出て、病院の外に備え付けられてるベンチに座りながら電話する。話相手は母さんだ。俺の実家は結構離れている。ここに来るというのも大儀だろう。だからこうして無事の報告を兼ねて電話している。

「うん…うん。大丈夫。大丈夫だよ、母さん。うん、…うん。…うん、わかった」

母親がしきりに心配して声をかけてくるのに俺は返事を返す。

「…母さん。うん、ありがとう。大丈夫。俺なら大丈夫。うん…じゃあ」

母親が電話を切ったのだろう。つー、つー、と通話が切れる音が聞こえる。それを確認してから俺は通話ボタンを切って、手の中に包み込むように携帯を握る。はぁ、と額に携帯を押し当てるようにして、俺は深々と溜息を吐いた。

「…もう、どうなるかわからない」

歴史は変わりつつある。なのはちゃんとはやてちゃんは出会った。それが一番大きな変化。なのはちゃんは家族と良好な関係を築きつつある。はやてちゃんもなのはちゃんが関わった事によって多分、今後の展開は大きく変わるだろう。

最早歴史は…俺の知る歴史は参考程度にしかない。だけでも、それが大筋の未来だと言う事には変わらないと思う。ジュエルシードとか、闇の書とか。内容が細かく変わって予想だにしない未来になるだろう。

…なら、俺に何が出来るだろう。そう考えてみても、俺にはもう、何も出来ないのかもしれない。歴史はもう変え尽くしてしまった。修正が聞かない程までに。A、Sの物語なんて既に根元から崩れてしまっている。

なら…俺に出来る事。それは……………。

—Side out—

*
*
*

—Side　なのは—

「尚也さん、退院おめでとー!!」

パーン、とクラッカーが鳴る。私とはやてちゃんのかげ声によって始まったのは尚也さんの退院祝い。翠屋が閉店した後、翠屋にパーティ会場を作ってお祝い。尚也さんは戸惑ったように照れているけど問題無しなの！

お母さんやお父さんははやてちゃんのお父さんとお母さんとか仲良さそうに話しているようで、お兄ちゃんやお姉ちゃんは尚也さんに話しかけているみたい。私も話しかけたいけど、なんか行きづらい…。

「うー…」

「なのはちゃん、何唸ってるんや、ほら、これ食って機嫌治し？」

「はぐ、はむはむ……うー……」

「はい、次はこれやでー」

「はぐはぐ……ってはやてちゃん！ 私で遊ばないで欲しいなのっ
！！」

「遊ばれるなのはちゃんが悪いんや」

「うーっ、うーっ！！」

ニヤニヤと意地悪い笑みを浮かべながらはやてちゃんがからかってくる。うーっ、私は動物か何かと違うのっ！ まったくはやてちゃんは悪戯好きだから困るなの。良く騙されるし……。怖い話とかするし……。

「ほらほら、機嫌治し？」

「はむっ……はむはむ……」

「なのはちゃん、これ好きやろ？」

「うんー、好きー」

「ほれ、どんどんお食べー」

「はむはむ……」

でも、何だかんだ言っってはやてちゃんは優しいから大好きです。私の大事なお友達です。もぐもぐ……。

「……はやてちゃん、それって餌付けにしか見えないんだけど……餌付けしてるの？」

「なのはちゃん、猛獣やからこうやって餌やらんと噛みついて来る

んや」

って！ 尚也さんに何言ってるのはやてちゃんっ！！ あ、口の中に物が入ったまま、もうーっ！！

「もぐっ、ごく…んっ…！ はやてちゃんっ！ 酷いなっ！！

誰が猛獣なのっ！！」

「きゃー！ なのはちゃんが私を食べに来たー！ 尚也さん助けてーっ！」

「え？ っと、と？」

「うーっ！ 尚也さんまで私の事猛獣って言うのーっ！？」

「え？ いや、そんな事は…」

うーっ！ はやてちゃん、何後ろでアツカンベーしてるの！！ ゆるゝさゝなゝいゝんゝだゝかゝらゝっ！！ 私のはやてちゃんの方に向かおうとするけど、はやてちゃんが尚也さんの背中を掴んでるから尚也さんも一緒に回って回れない。うーっ！！

「尚也さん、そこ退いて！」

「退いてと言われても背中を握られてまして…」

「尚也さん、どうもありがとーな？ 私、嬉しいっ！」

「むーっ！！」

面白くないなの！ もう、尚也さんの馬鹿！ はやてちゃんの馬鹿っ！！ 私は面白くなくて、つい思わず、尚也さんの服を掴んで

勢いよく引つ張った。すると、尚也さんの体が一步前に倒れて、はやてちゃんも前に出る。するとはやてちゃんの車椅子のタイヤが尚也さんの踵に勢いよく当たりました。

「ほああっ!?!」

「あっ、な、尚也さんっ!?!」

「な、尚也さん、大丈夫ですか!?!」

「ぐおおおっ…だ、大丈夫…っ…!」

踵を押さえながら蹲る尚也さんの肩に手を置きながら私は尚也さんの顔を見る。苦しげに眉を寄せて唇を一字に引き結んでいる。はやてちゃんが逆側から尚也さんの肩に手を置いて私と同じように心配そうに見ている。

それから私とはやてちゃんが少しだけ尚也さんに怒られて、それから皆で楽しくお食事したり、お喋りしたりしました。尚也さんも笑っていて、はやてちゃんも笑っていて、皆笑っていました。とても楽しかった。

だけど、その時間が終わったのは…尚也さんが皆に話したい事がある、と言った時でした…。

— Side out —

＊ ＊ ＊

—Side はやて—

「大事な話が、あるんです」

しん、と静まりかえった翠屋の中で開かれた尚也さんの退院祝い。その中で、話をするのは尚也さん。前みたいな、まるで我慢するようなああの顔を浮かべながら尚也さんはそこにいた。だけど、あの顔とはちよつと違う。

どちらかと言えば…怖がっている。私は尚也さんの隣にいるからわかるけど、尚也さんの手は硬く握られて震えている。それに私は思わず眉を顰める。私の逆隣にはなのはちゃんがおって、なのはちゃんも尚也さんの異常には気付いているみたいや。

静まりかえる中、口を開いたのは士郎さんやった。士郎さんは真剣な表情で尚也さんを見つめておる。

「…大事な話、って言うのは？」

「…俺が倒れた理由…そして…なのはちゃんとはやてちゃん、そして、高町家と八神家の皆さんに関わる大事なお話です」

「…私と…はやてちゃん？」

…何でやろう。何で私となのはちゃんだけが別の括りにされたのは。他の皆は高町家、八神家で纏められておるのに、私となのはちやんだけがまるで特別なような話し方。それに訳もわからず、私はただ尚也さんを見つめる事しか出来ない。

「…俺たちに関わる大事な話、って、何だ？」

「…正直、口で言って説明するのは難しいです。…これを、持ってきました」

そう言っって尚也さんが取り出したのは、なんの変哲もない一冊のノートやった。尚也さんはノートを皆に見せるようにした後、小さく息を吐き出す。その吐息が震えている事は誰が見ても明らかやった…。

「…これを見てください。見ても、笑わないでください。正直、笑っってしまうような事が書いてあります。だけでも…それでも、笑わないでください」

「…わかった」

答えたのはお父さん。皆も尚也さんの真剣な雰囲気には頷いてくれた。それを見た尚也さんは私にノートを手渡してくれた。まずは私から、って事やな。

私はおもむろにノートを開く。最初のページ。そこではまあまあ

綺麗な字で何か色々と書かれていた。メモ書きみたいな感じや。要点だけを書いたような、そんな文章。

…えと、何々…？ リリカルなのは？ …なのはちゃん？ なんか、リリカルって。…魔法少女…？ 父、母、兄、姉の五大家族…ごく普通の小学生…親友は、アリサとすずか。あれ、何でアリサちゃんとすずかちゃんは名前があるのに私のは無いんやろ？

アリサちゃんとすずかちゃんはなのはちゃんと私と同年の友達や。切欠はなのはちゃんがアリサちゃんと喧嘩して、喧嘩の原因となったすずかちゃんがそれを止めて、と、私は現場にいなかったからわからんけど、それから仲良くなった友達や。雨降って地固まるって奴やな。…あれ、違うか？ まあ、ええわ。続き続き、と。

…魔法少女…ユーノ・スクライア…ジュエルシード…フェイト・テストロッサ…。よくわからない単語がずらずらと並んでいる。だが、確かに尚也さんが言ってたように思わず笑ってしまう。簡単に言えばこの内容はなのはちゃんが魔法少女としてフェイトという少女とジュエルシードっていう危険なものを魔法を使って回収していくというお話。

作り話としては上手く出来てるけど、登場人物をなのはちゃんにしている所がなんか変。尚也さんがそんなお話しくとは思えないし、尚也さんの様子からこれを作り話として見せたかった訳やない筈や。そんな事を思いながら次のページをめくった。そこにはリリカルなのはA、Sと書かれていた。まるで続編…。だけど物語が書きたい訳やない筈や。私はそう思って眼を通す。

リリカルなのはから約半年後…八神はやて…。私？ …天涯孤独…。家族が…居ない…。下半身不随…。誕生日に「闇の書」起動…。闇の書の騎士、ヴォルケンリッターと家族になり、家族を得る…。だけど…闇の書によって余命、この時点で約半年…？

かたかた、と手が震えておった。かちかち、と歯が鳴っていた。はやて？ と呼ぶお母さんの声が遠い。

天涯孤独？ どういう意味やそれ。私にはお母さんとお父さんが

いるやないか。だけど、これは9歳の話？　その時には…もう、お母さんとお父さんはいない？　誕生日に「闇の書」が起動して、そこから出てきた人達と家族になるけど…余命、約半年？　クリスマスには死ぬ？　なんやの…これ…。

「なん…なん…？」

「……」

「尚也さん…これ…なんや…？　冗談にしては…笑えへん…」

「冗談…なんかじゃない。読んだら、次の人に…」

「何でお父さんとお母さんが死ぬって書いてあるんやっ！！　ちゃんと説明してえなっ！！　じゃなきゃわからへんっ！！」

だんっ、とテーブルに強く叩き付けた手が痛い。だが、それでも叫ばずにはいられへんかった。私の叫びに驚いたようにお父さんもお母さんも、皆、驚いた顔をして私と尚也さんを見渡している。

尚也さんの身体が震える。私と眼を合わせようとしないで、必死に反らして震える声で言う。

「…皆に、見せたら…説明、するから…」

お願いだ、と震えながら頼まれた声に…私は、無言でお母さんにノートを手渡した。これ以上、このノートを見ていたくなかった。じゃないとどうにかなってしまいそうだったから。

お母さんはお父さんと一緒にノートを見て、そして声を失っていた。何か確かめるように尚也さんを見つめるけれど、尚也さんは首を振るだけ…。

そしてノートは土郎さんや桃子さん、恭也さん、美由希さん…最後になのはちゃんへと渡った。なのはちゃんがゆつくりと、確かめるようにノートを見て、不安げに尚也さんを見上げた。

「…尚也…さん…これ…何…？」

なのはちゃんの震えた声が、皆の代弁やったと思う。このノートには確かに普通に見れば笑い話で済むような、尚也さんの品性を疑う程度で終わっておったかもしれへん。だけど、尚也さんはまったく茶化す様子もなく、これを見せた。今にもまた倒れそうな顔で皆の顔を見渡している。

そして…尚也さんは絞るような声で…こう言った。

「…俺…一度、人生やり直してるんです…」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2918u/>

Distortion World

2011年10月8日13時23分発行